

(3) D地区

D地区は、I区の最南部、近畿自動車道松原すさみ線からB地区までの尾根筋の西側斜面である。I区では8ヶ所の溜池が確認されているが、この地区には6ヶ所に溜池が集中している。D地区の調査は、この溜池の調査を中心として実施した。これらの溜池の調査については、堤の構築方法やその年代、および「樋」などの付属施設の位置や構造を把握することを目的とした。

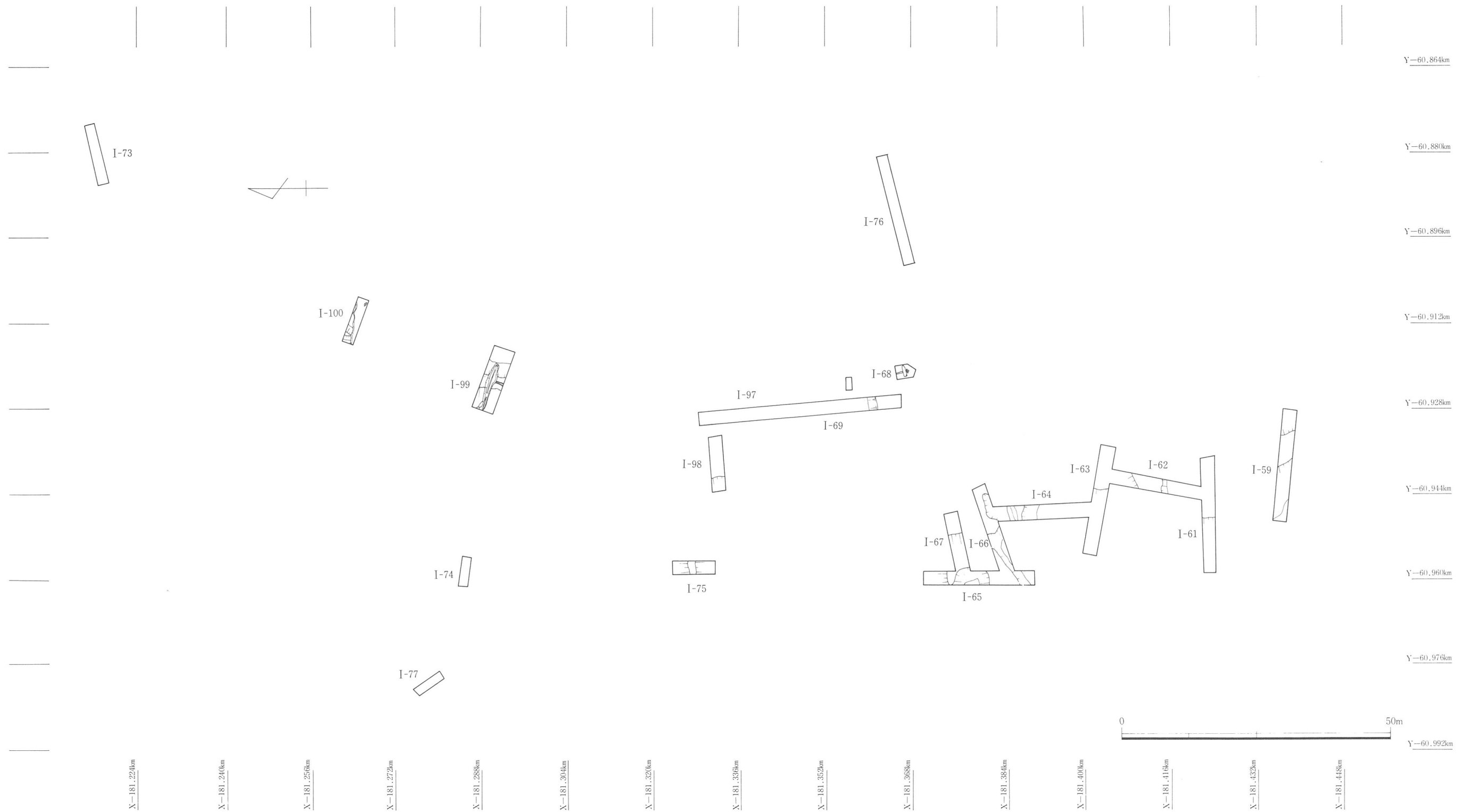
D地区の溜池群は、約2,500㎡の面積を持つ青池と、その北側に位置する約2,000㎡の面積を持つ皿池が大きな比重を占めている。他の4ヶ所の溜池は、全て向井山池と呼ばれている。面積も約100～200㎡と非常に小さい溜池である。今回の報告書では、煩雑さをさけるため、便宜的に池1～4と呼ぶことにしたい。現地を観察すると青池と皿池は共に、北に伸びる尾根筋の西側斜面にある南から北に向かう幅20mの谷筋に立地する。この谷筋は皿池の北端からその方向を北東に向け京上川に向かって開口している。青池、皿池は尾根筋を生かし自然の堤とし、谷筋の北あるいは北東側に築堤し溜池にしている。

青池にはI—59、61～69の10調査区を設定した。また、皿池にはI—97～100の4調査区を設定した。各向井山池には1ヶ所づつI—73（池4）、74（池1）、75（池3）、77（池2）の各調査区を設定した。また、青池の北側堤の東側の尾根には、地元住民から「殿様御殿」と呼ばれている尾根が削られて抉れている地点があった。この地区にI—76調査区を設定した（第15図）。

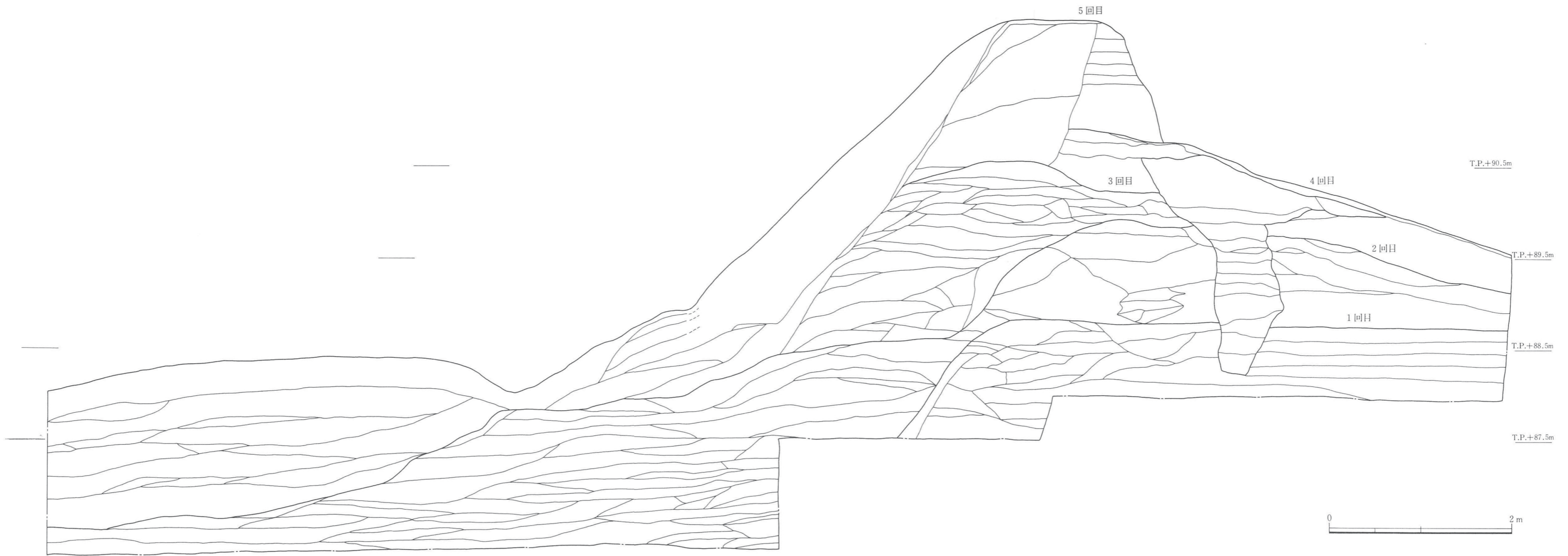
青池は、D地区の最南端に位置している。長さ約100m、最大幅40m、最大深さ約4mの規模を持つ。「樋」は3ヶ所確認でき、現在でも機能している。1の樋はコンクリート製であり露出しているが、2、3の樋は埋没しており本体は確認できない。

青池に設定したI—59、61～69の各調査区のうち、59、61～67調査区は溜池の西側の堤に設定した。尾根筋をそのまま利用している堤である。堤に直行するように59、61、63、66、67の各調査区を、尾根に平行するように62、64、65の各調査区を設定した。

59、63、67調査区では、堤頂上部で表土下すぐに地山となり、尾根筋をそのまま利用して堤にしていることが確認できた。61調査区では調査の結果、この調査区周辺では尾根が若干低くなっていることを確認した。この部分に盛土をし、堤を築いている。盛土は堤上で約0.8mを測る。一回で積み上げている。黄褐色土であるが3層に分層できる。66調査区は、青池の盛土された北側堤の一部である。幅約2.5m高さ約1mの堤である。盛土は一回で積み上げている。黄褐色土であるが5層に分層できる。



第15図 I-D地区調査区位置図



第17图 I-69調査区東壁断面图

造と素材から1、2の樋は、コンクリートと陶製土管が使用されていることから、近現代に作られたものである。つまり3回目以降の増築は、近現代に行なわれたと考えられる。

ここで問題になるのは、当初からある3の樋の時期、つまり青池の構築年代である。ここに個人蔵であるが、天保八年（1837年）の上之郷村絵図が保存されている。これによると現在の青池とほぼ同じ位置と思われるところに「アヲ池」という溜池が存在する。この池が現在の青池と一致するならば、少なくとも1837年までこの池の存在を遡らせることができる。

この青池の堤を築いた土はどこから運ばれたものであろうか。前記したようにこの堤の東側には「殿様御殿」と呼ばれる、尾根が削られ抉れている場所がある。ここにI—76調査区を設置して調査をしたところ、この周辺の地山の黄褐色土が堤を築いた土と、非常に似ていることが判明した。この地点から土を削り下へ落とせば、そのまま堤に行着く。このことから、青池の堤はこの「殿様御殿」から供給したものと考えられる。

皿池は青池の北約20mに位置する。長さ約80m、最大幅25m、最大深さ3mを測る。樋は1ヶ所確認できる。現在でも機能している。樋は埋没しており本体は確認できない。

皿池に設定したI—97～100の4調査区のうち、98～100調査区は溜池の西側の堤に設定した。この堤も青池と同様に、尾根筋をそのまま利用している堤である。堤に直行するように各調査区を設定した。このうち99調査区は、樋の確認も同時にできるように考慮して設定した。97調査区は青池との関係を明らかにするために、69調査区の北側に連続して設定した。谷筋に対して堤を築いていると思われる地点は、調査区外のため今回調査することはできなかった。

皿池は、当初堤にあまり盛土されていないと予想していた。しかしながら調査の結果、尾根上に約1～1.5mの盛土をし、堤を築いていた。特に99調査区は、樋を通していてもあってか西側の斜面にかけて幅約3m以上の盛土をしている。

堤は断面の観察では、尾根上ではほぼ平行に黄褐色土などの土を積んで堤を築いているが、99調査区の西斜面では斜面に沿って土を盛り、堤を築いている。また、青池69調査区で観察できた堤を強化するための「鋼」が作られているのを確認した。作り方も青池69調査区と同様である。一旦堤を完成させた後、溝を堤に平行して掘削し、この中に粘土質の土を平行に突き固めて埋め戻している。

この「鋼」は、99、100調査区では1ヶ所ではしか確認できないが、98調査区では3ヶ所の「鋼」が確認できる。98調査区ではいったん堤を築いた後、さらに約0.8mの盛土を行

ない積み直しを行なっている。「鋼」は、当初の堤に1ヶ所、盛り直された堤に2ヶ所確認できる。盛り直された堤の2ヶ所の「鋼」は西側が新しい。堤の高さは変えずに、斜面側に堤を拡張したものと思われる。このことから皿池の堤は3回にわたって増築していることが確認できた（第18・19図）。

98調査区における当初の堤の頂上部の標高は約86mである。これは99、100調査区における尾根の地山頂上部とほぼ同じ標高である。これから考えると、当初皿池は98調査区周辺の尾根の低い部分にのみ約0.8mほどの盛土をし、他は尾根筋をそのまま利用した溜池であったと思われる。その後、99、100調査区周辺にも盛土をし堤をかさあげして貯水量を増加させ、さらに98調査区周辺では堤をさらに補強したものと思われる。

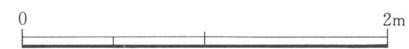
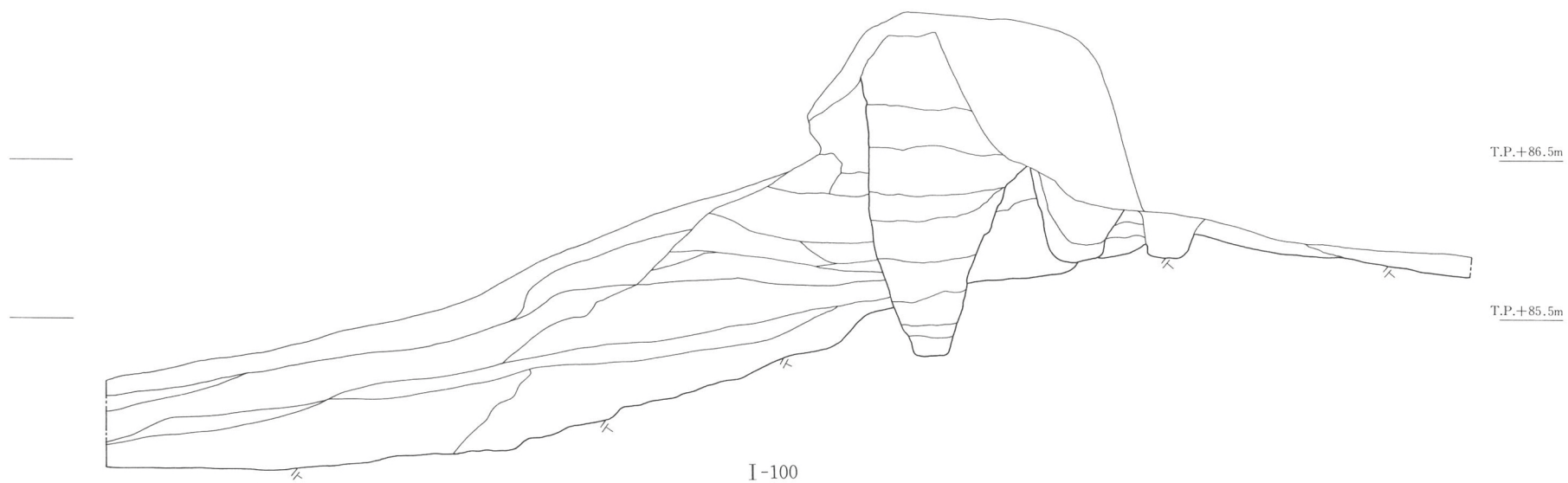
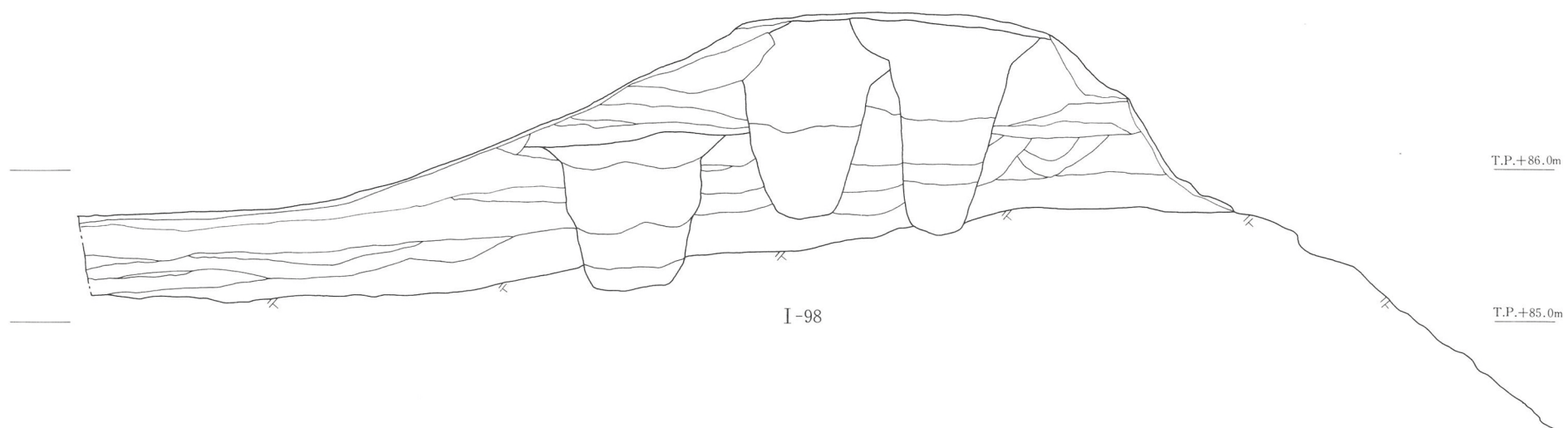
皿池における「樋」の位置は、当初99調査区1ヶ所と思われていた。しかしながら調査のために池の水を排水すると、現在の「樋」の直下にもうひとつの「樋」が確認できた。また、100調査区においても「樋」を1ヶ所検出した。

99調査区における上部の樋は、長さ2.5m、直径20cmの丸木材を使用し、そのなかを刳り貫いて使用している。組み合わせた樋の固定には釘を使用している。導水管には、陶製の土管を使用している。下部の樋は、現在は使用されていない。すべてを確認することはできなかったが樋、導水管とも直径20cmの丸太材を使用している。組み合わせた樋の固定には、薄く削った竹を巻き付けている。

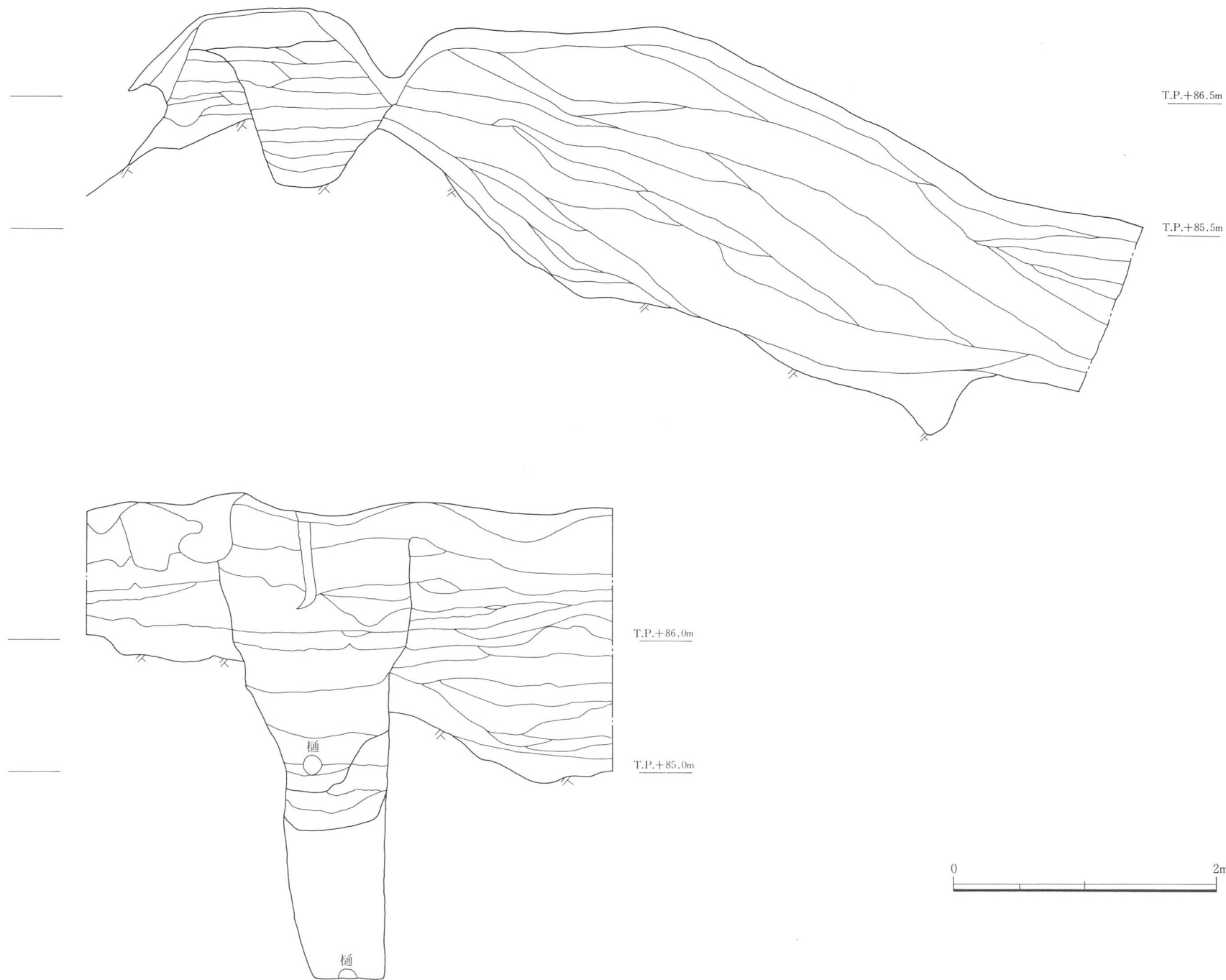
この上下2本の樋はまったく同じ位置に設置してあるが、樋の構造に違いがあるため同時期に設置したものとは思えない。下部の樋は皿池築造当初からのものであり、上部の樋は増築された際に設置したものと思われる。これらの樋は、前記したように尾根筋を利用した堤上に設置されている。このため尾根筋を切り込んで樋を設置している。下部の樋を通すため、地山を尾根上で深さ約2m、幅約0.6m、長さ約13mにわたり掘削している。上部の樋は堤を盛土した後、堤上で深さ約2.6m、幅約1.4m、長さ約8mにわたり掘削している。

100調査区で検出した樋は、現在使用されておらず、完全に埋没していた。99調査区と同様、堤を盛土した後に堤、地山を切り込んで設置している。樋を設置するために、堤上で深さ約2.5m、幅1.6m、長さ約10mにわたり掘削している。樋は長さ約1.6m直径約30cmの丸太材を半切し、そのなかを刳り貫いて使用しているが、上部は欠損している。導水管には、陶製の土管を利用している。

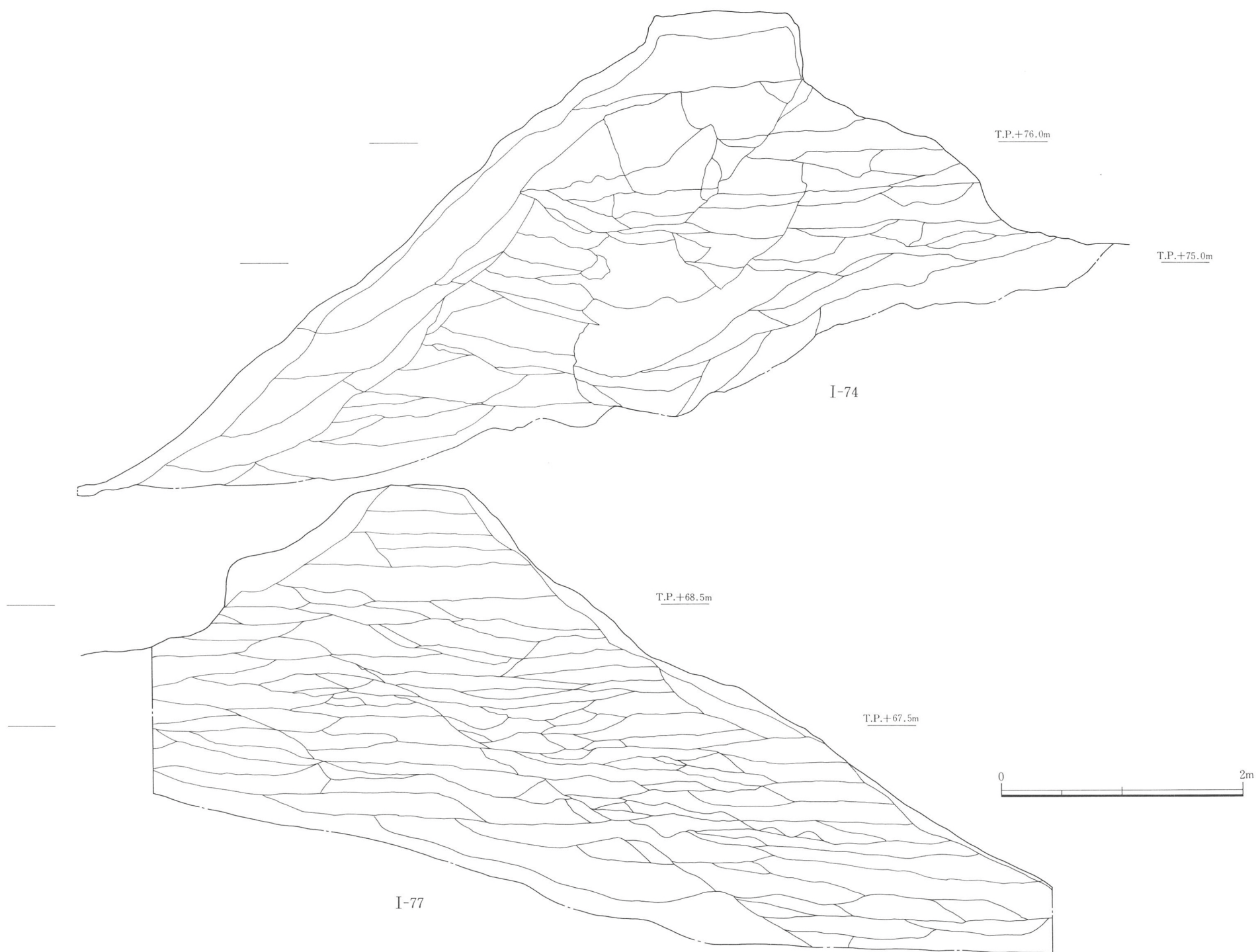
100調査区の樋はその構造や、導水管に土管を使用していることから99調査区の上部の



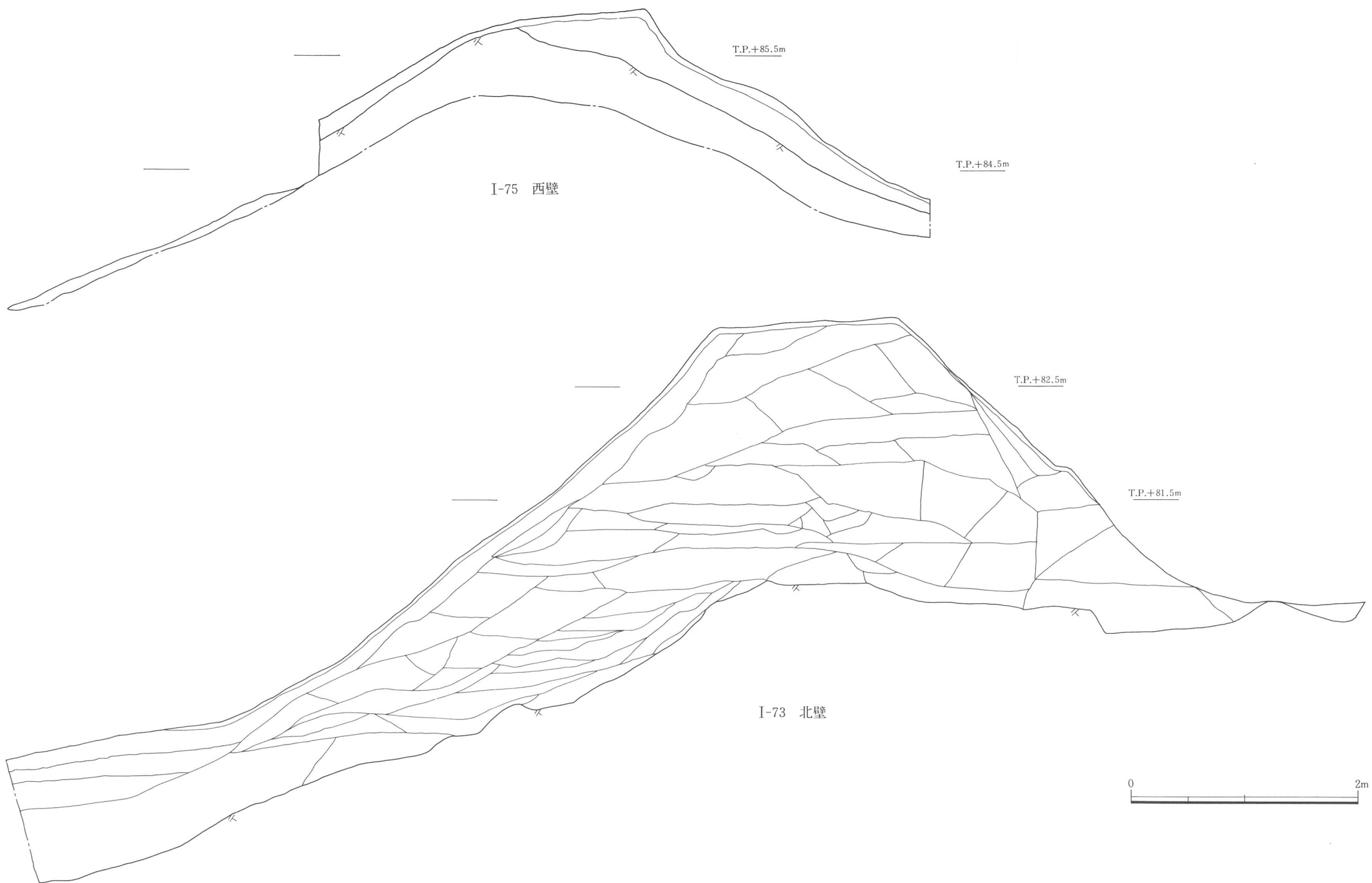
第18图 I-98・100調査区南壁断面图



第19図 I-99調査区南・東壁断面図



第20図 I-74調査区北壁・I-77調査区南壁断面図



第21図 I-75調査区西壁・I-73調査区北壁断面図

(4) E地区

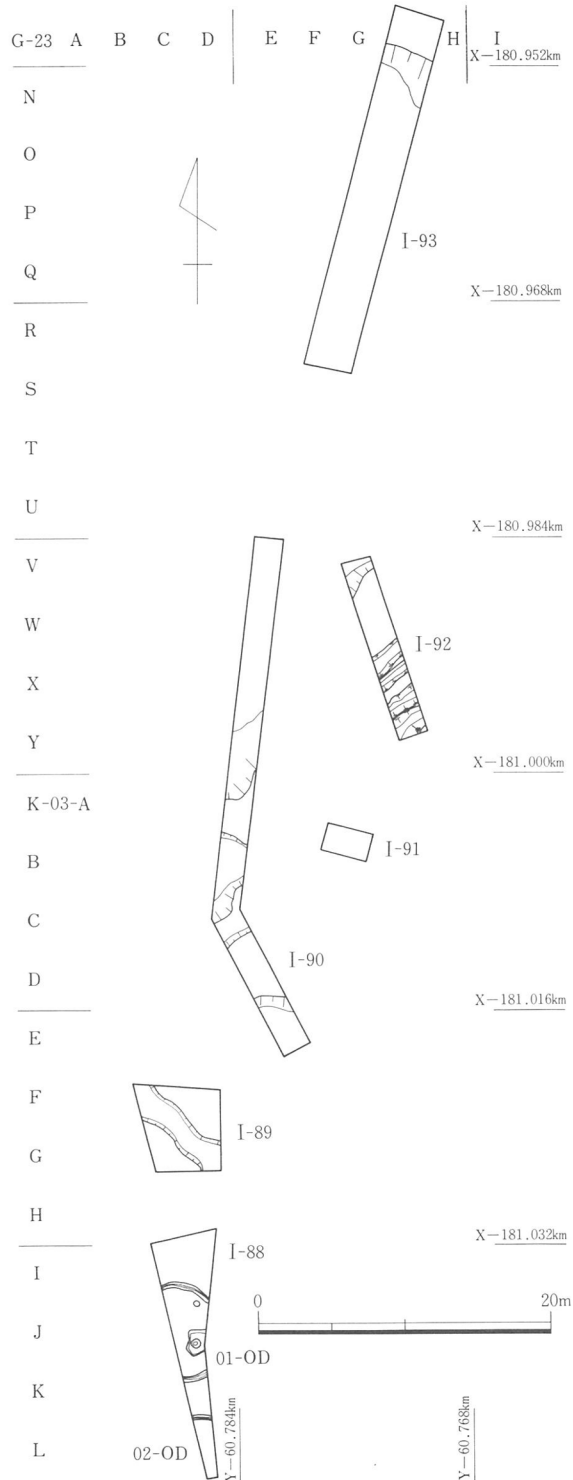
E地区は、A～D地区が位置する丘陵とは京上川を挟んだ東側の対岸部にあたる。西に伸びる丘陵の先端部に立地する。現状はこの丘陵上と北、南斜面を利用した耕作地となっている。1988年に実施された試掘調査では、この南側の耕作地から弥生時代の竪穴住居跡を検出している。

弥生時代の竪穴住居跡を検出した耕作地に、I-88調査区を、そのすぐ北にはI-89調査区を設定した。

これらの調査区の他に、88・89調査区より一段高い丘陵上の耕作地にはI-90～92調査区を、北側斜面を利用した耕作地にはI-93調査区を設定した(第22図)。

I-88調査区は、試掘調査によって弥生時代の竪穴住居跡を検出しているため、全面調査を実施した。現代の耕作土、床土を除去した段階で竪穴住居跡01-OD、02-ODのプランを検出した(第24図)。

竪穴住居跡01-ODは、K03-I C・I D・J C・J Dから検出した。しかしながら調査区が用地内ぎりぎりの位置にあるため、幅が最大でも4m程しかなかった。このため、住居跡の一部分しか調査することができなかった。



第22図 I-E地区調査区位置図

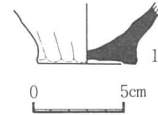
住居跡は、黄褐色砂礫あるいは黄褐色シルトの地山を掘りこんで築造している。検出地点で標高56.8mを測る。埋土は黄褐色シルト、明黄褐色シルト、褐色シルトなどである。検出できたプランより復元すると、平面形は約7.4mの円形を呈するものと思われる。

壁は北壁は急激に立ち上がるが、南壁はやや角度が緩やかに立ち上がる。壁高は、床面から約0.3～0.4mを測る。壁溝は、南北両壁で確認できた。幅約0.2m、深さ約0.2mを測る。床面は、ほぼ水平であり、張り床をもつ。張り床は厚さ約0.1mである。黄褐色シルトあるいは黄褐色粘土を用いている。炭化物が混入しておりやや堅く締まっている。

住居跡のやや南東側に炉を検出した。炉は南北約1.7mを測り、東西は検出長で約1.2mを測る。深さは約0.1mである。炉の中心部から直径、深さとも約0.5mの土坑を検出した。炉内の埋土は、炭化物、焼土が多量に混じっているが、炉の壁面には焼けた痕跡はみられない。炉内より3個の礫が出土したが、火を受けた痕跡はない。

柱穴は8個検出している。直径0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は黄褐色シルト、明黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。住居跡の一部分しか調査できなかったため、支柱穴が何本であるか明らかでない。

出土した遺物は非常に少なく、また細片のため図化できたのは甕の底部1点のみである。時期的には、弥生時代中期後半にあたると思われる。



第23図 I-88調査区01-O D出土土器

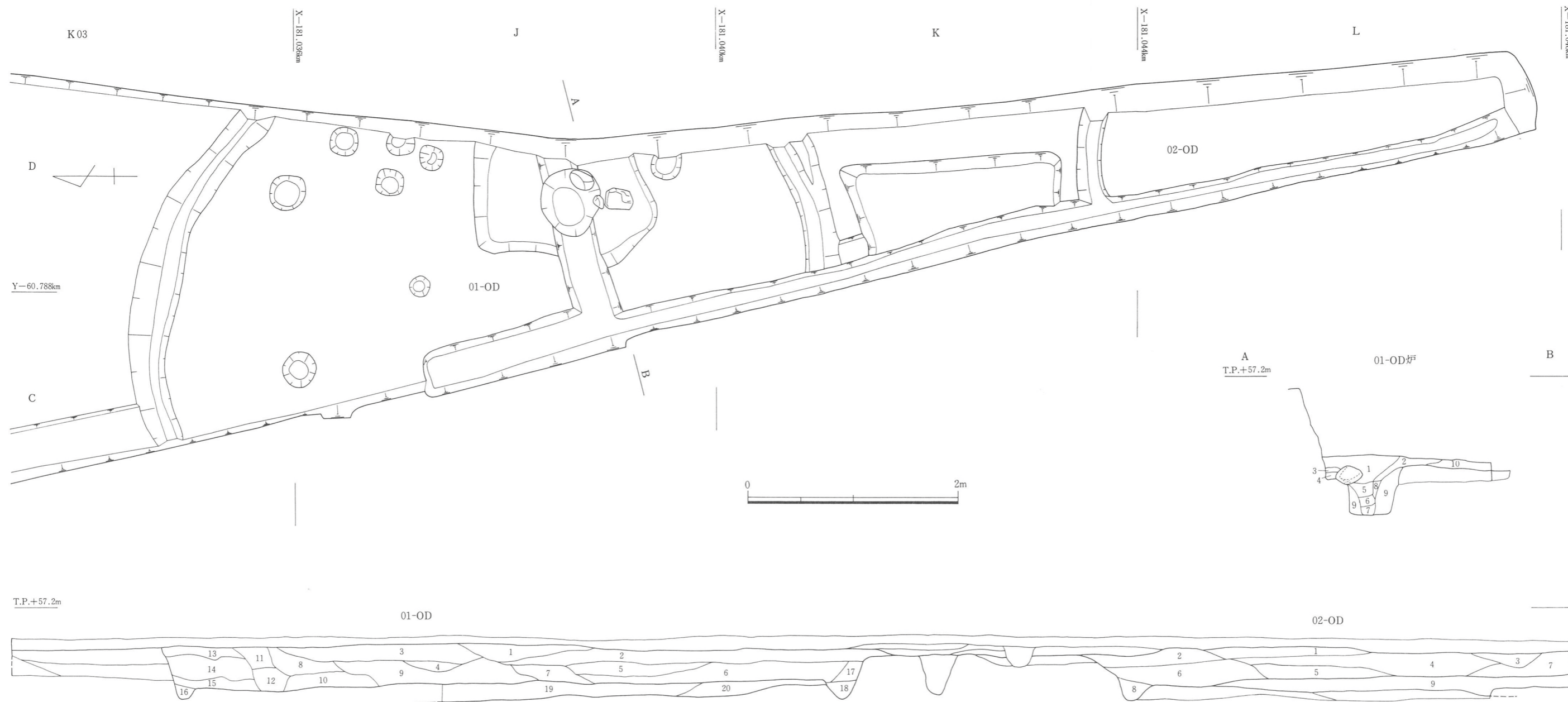
01-O Dの南約2.5mの地点で、深さ約0.3mの落ち込みを検出した。柱穴や炉は検出できなかったが、壁溝を検出したため、竪穴住居跡02-O Dとした（第24図）。

竪穴住居跡02-O Dは、K03-K Dから検出した。しかしながらこの住居跡も調査区の幅が1m程しかなかったため、一部分しか調査することができなかった。

住居跡は、黄褐色砂礫地山を掘りこんで築造している。埋土は黄褐色シルト、明黄褐色シルトなどである。検出地点での標高は竪穴住居跡01-O Dと同じ56.8mである。約1m幅しか調査することができなかったため、プランを復元することはできないが、ほぼ竪穴住居跡01-O Dと同じ規模の円形プランを呈するものと思われる。

壁は北壁のみ検出できた。角度は緩やかに立ち上がる。壁高は、床面から約0.3mを測る。壁溝は、幅約0.2m、深さ約0.2mを測る。床面は、ほぼ水平であり、張り床をもつ。張り床は厚さ約0.1mである。明黄褐色シルトを用いている。やや堅く締まっている。

出土した遺物は01-O Dと同じように非常に少なく細片のため、図化できない。時期的には01-O Dと同じである。



01-OD断面

- | | | | |
|--------------|--------------|---------------|-----------------|
| 1. 明黄褐色シルト | 6. 明黄褐色シルト | 11. 明黄褐色シルト | 16. にぶい黄褐色シルト |
| 2. 黄褐色シルト | 7. 明黄褐色シルト | 12. 黄褐色シルト | 17. にぶい黄色シルト |
| 3. 褐色シルト | 8. にぶい黄褐色シルト | 13. 明黄褐色シルト | 18. 黄褐色シルト |
| 4. にぶい黄色シルト | 9. 黄褐色シルト | 14. にぶい黄褐色シルト | 19. 明黄褐色粘土(はり床) |
| 5. にぶい黄褐色シルト | 10. 明黄褐色シルト | 15. 明黄褐色シルト | 20. 黄褐色シルト(はり床) |

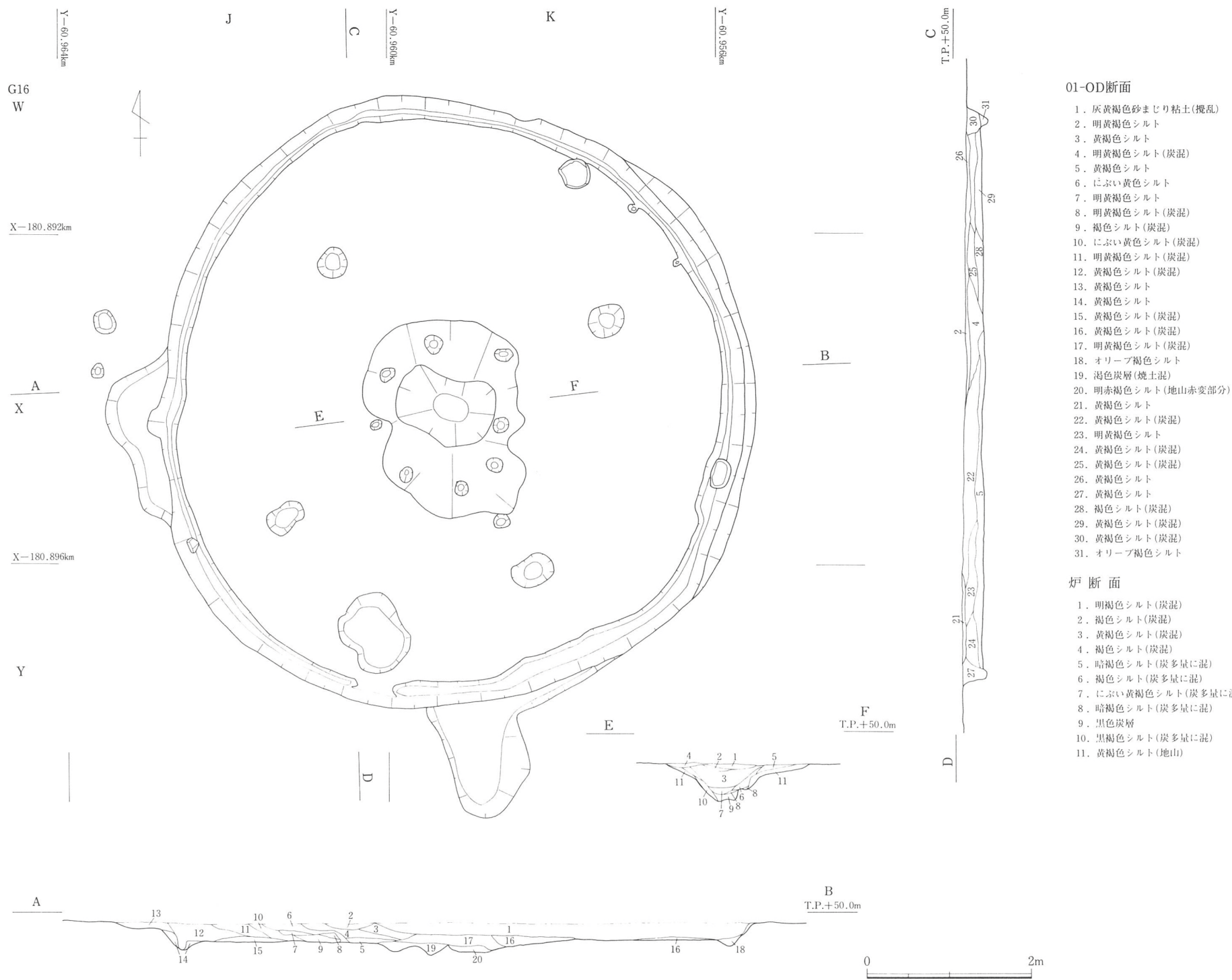
02-OD断面

- | | |
|--------------|-----------------|
| 1. 黄褐色シルト | 6. 明黄褐色シルト |
| 2. にぶい黄褐色シルト | 7. 明黄褐色シルト |
| 3. 黄色シルト | 8. 黄褐色シルト |
| 4. 黄褐色シルト | 9. 明黄褐色シルト(はり床) |
| 5. 明黄褐色シルト | |

01-OD炉断面

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1. 褐色砂まじり粘土(炭混) | 6. 黒色粘土(炭多量に混) |
| 2. 黒褐色シルト(炭多量に混) | 7. 黒褐色粘土(炭多量に混) |
| 3. 黒褐色シルト(炭混) | 8. にぶい黄褐色粘土 |
| 4. 黄灰色粘土 | 9. オリーブ黄色砂礫(炭混) |
| 5. 暗褐色砂まじり粘土 | 10. 明黄褐色粘土(はり床) |

第24図 I-88調査区01・02-OD平面図・西壁断面図 01-OD炉断面図



第27図 II-55調査区01-OD平面図・断面図



第26图 II - F 地区調査区位置图

査区に続くが、この調査区との比高差は約3mを測る。

基本層序は、第1層現代耕作土、床土、第2層旧耕作土、第3層明褐色粘土、暗褐色砂礫など（地山）である。

遺構は、地山上面で検出した。そのほとんどが平坦面からの検出である。弥生時代の竪穴住居跡2棟・溝・土坑・柱穴群、古墳時代前期の土坑・柱穴・谷地形、中世の土坑などを検出した。

以下、弥生時代の遺構から説明する。

竪穴住居跡01—ODは、G16—WJ、XJ、YJ、WK、XK、YK、XLで検出した。住居跡は、暗褐色砂礫の地山を掘りこんで築造している。検出地点で、標高は約50mを測る（第27図）。

平面形は、直径約7.5mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、床面から約0.2mを測る。住居跡の西側G16—XJ付近では、幅0.6m、長さ2m、深さ0.1mにわたって住居廃絶後の壁の崩落がみられる。埋土は黄褐色シルト、明黄褐色シルト、オリブ褐色シルトなどである。炭、焼土が若干混入している。

壁溝は、幅約0.3m、深さ約0.1mを測るが、住居跡の南側約0.4mでは壁溝が途切れるので、この位置が出入口と考えられる。この部分の住居側から、幅約0.8m、長さ約1m、深さ0.1mの土坑を検出した。

床面はほぼ水平で堅く締まっているが、I—88調査区で検出した住居跡のような張り床はもたない。

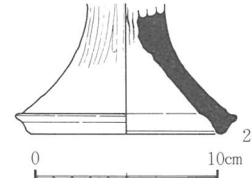
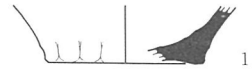
住居跡のほぼ中央から炉を検出した。幅0.8m、長さ1.3mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。炉の底には炭、焼土が充満している。炉の周囲には幅2.2m、長さ2.5m、深さ0.1mにわたって焼土、炭が堆積している。

炉の北側には幅0.1m、長さ0.7m、高さ0.1mの土堤状高まりを検出した。この部分は非常によく火熱を受けており、床面下0.1mまで赤化している。また、炉の南側にも一部分火熱を受けている所がある。また、炉を取り囲むように、その周辺に直径0.2m、深さ0.1mの小穴を8ヶ所検出した。この小穴の機能は不明であるが、埋土の中には焼土、炭が混入しており、炉に伴うことは確実である。

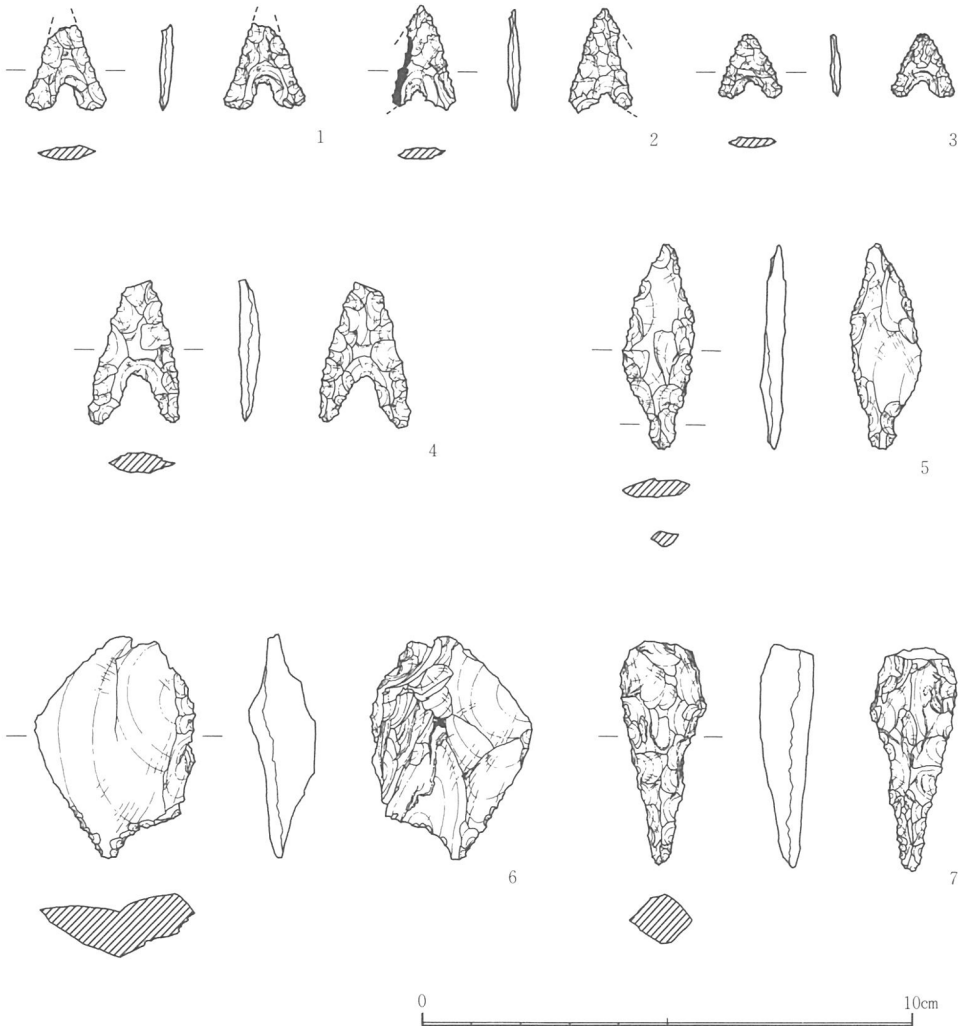
柱穴は4本検出した。柱穴の規模は、1本のみ直径0.4mの円形であるが、他の3本は短径0.4m、長径0.5mの楕円形を呈する。深さは、0.4～0.5mを測る。この楕円形を呈する柱穴は、柱を抜き取るために再掘削したため、このような形状になったと思われる。

遺物は、土器はそのほとんどが小破片であり出土量も少ない。
 図化したものは、1の甕底部および2の高杯の脚部のみである
 (第28図)。

しかしながら調査の途上で、サヌカイト製の石鏃、石錐や剥片
 チップ類が出土した。このため、住居跡の埋土を、全て持ち帰り
 洗浄した。この結果、多くのサヌカイトの剥片、細片が出土した。
 住居跡の北東、西側の壁際から台石がしていることから、住居跡
 01—0Dは、石器製作跡の可能性があると考えられる。



第28図 II-55調査区
01—0D出土土器



第29図 II-55調査区01—0D出土石器

今回石器で図化したものは、石鏃5点、石錐2点である。1から4までは凹基無茎式の石鏃である。4を除き小型の石鏃である。5のみ凸基有茎式であるが、未製品であると思われる。6、7は石錐である。6は横長の剥片の一端を利用し、正裏面より部分的に加工をおこない、錐部を作り出している。7は上部を欠損しているが、剥片の正裏両面から全面加工をおこない、錐部を作り出している（第29図）。

また、埋土の洗浄の結果、種子や炭化物が出土したが、その種類等詳細は不明である。

竪穴住居跡07—ODは、G16—WJ、XG、YG、XH、YH、XI、YIで検出した。01—ODの西約5mの地点である。住居跡は、暗褐色砂礫の地山を掘りこんで築造している。検出地点で、標高は約50mを測る。平面形は、直径約5.5mの円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は床面から約0.2mを測る。しかしながら後世の削平のため、壁体は南東側のみに残存する。埋土は浅黄色粘土、明黄褐色粘土、にぶい黄橙色粘土などである。炭が若干混入している（第31図）。

壁溝は、幅約0.1m、深さ約0.1mを測る。01—ODと違い、住居跡全体にめぐっている。床面はほぼ水平で堅く締まっている。01—ODと同じく、張り床はもたない。

住居跡のほぼ中央から炉を検出した。直径0.8mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。炉の底には炭、焼土が充満している。炉の周囲には幅1.7m、長さ2m、深さ0.1mにわたって焼土、炭が堆積している。

炉の形状は、01—ODと非常によく似ている。炉の南、東側にアーチ状の、幅0.1m、長さ1.5m、高さ0.1mの土堤状高まりを検出した。また、炉の東には短径0.3m、長径0.4m、西側には短径0.2m、長径0.3mの楕円形を呈する小穴がある。深さはともに0.2mを測る。

柱穴は4本検出した。柱穴の規模は、短径0.3~0.4m、長径0.4~0.6mの楕円形を呈する。深さは、0.2~0.5mを測る。柱穴の形状から、柱穴からは柱を抜き取ったものと思われる。

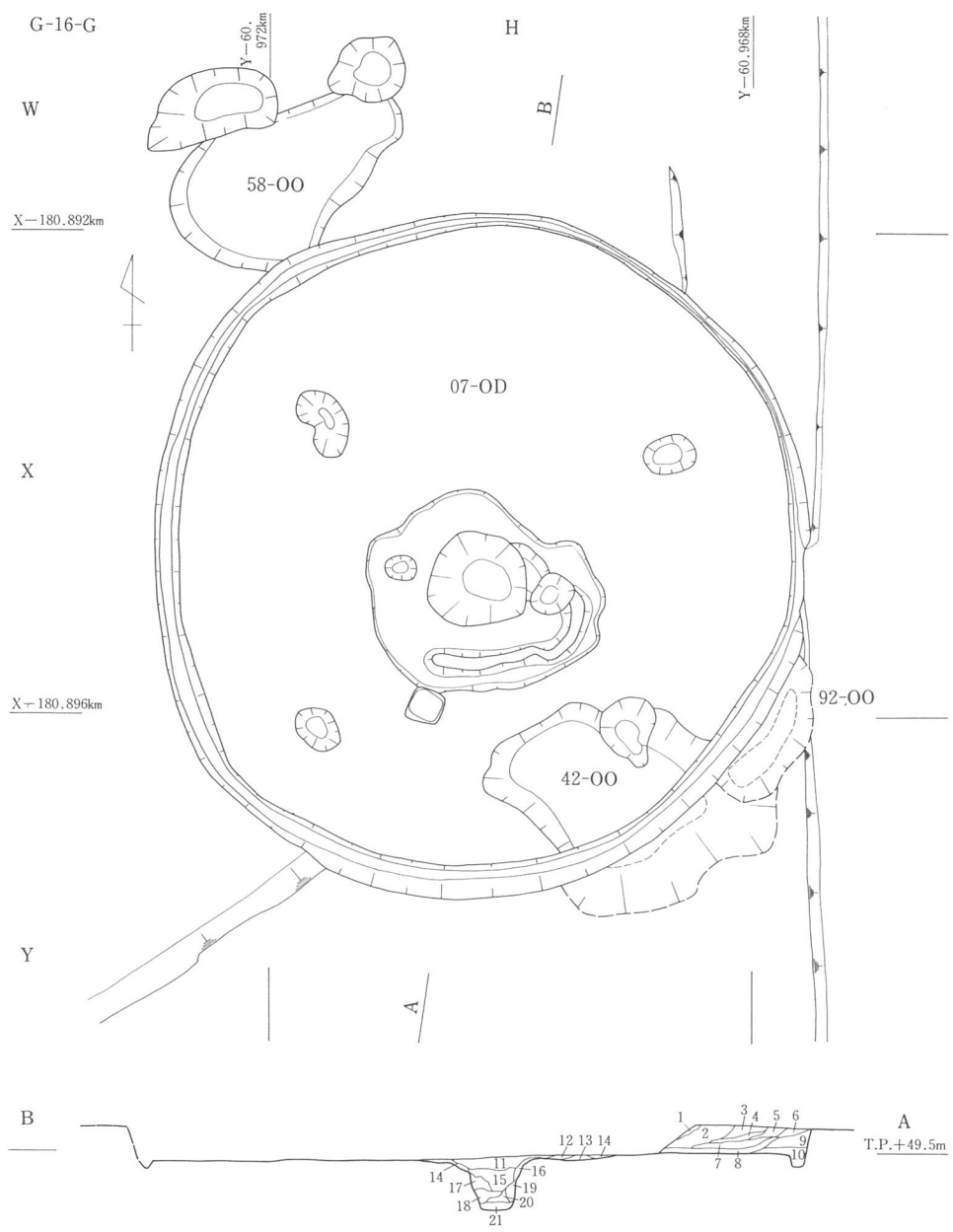
遺物についても、01—ODと同じく非常に少ない。土器はそのほとんどが小破片である。図化したものは、1の甕底部のみである（第30図）。



第30図 II—55調査区07—OD出土土器

07—ODからもサヌカイトの剥片、細片類が出土し、炉の南側からは、台石も出土している。このことから住居跡07—ODについても、石器製作跡の可能性があると考えられる。

石器で図化したものは、石鏃4点、大型蛤刃石斧1点である。石鏃は1、2が凸基有茎

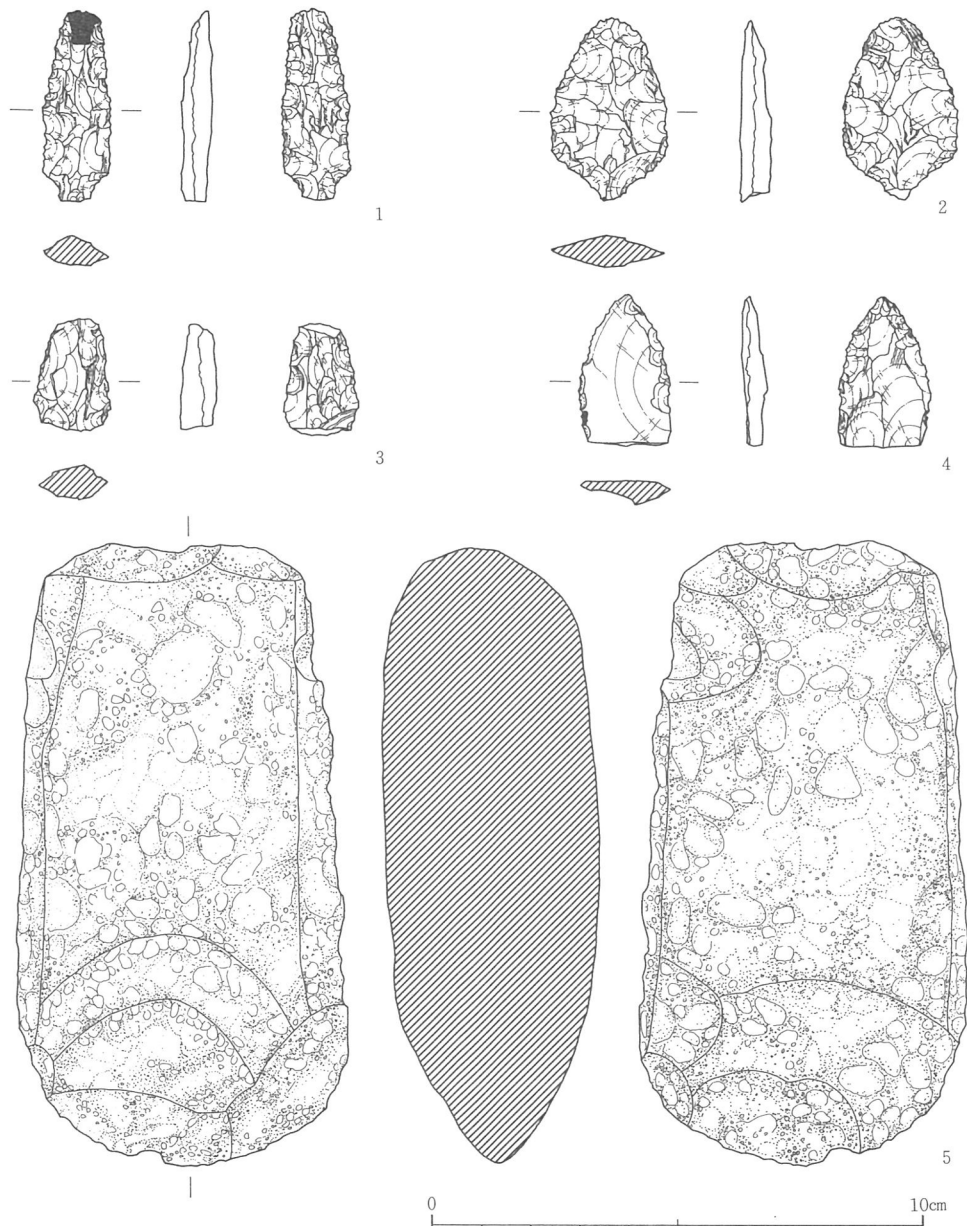


- | | | |
|-----------------|------------------|---------------|
| 1. 明黄褐色粘土 | 8. 明黄褐色粘土 | 15. にぶい黄橙色粘土 |
| 2. 浅黄色粘土 | 9. 明黄褐色砂まじり粘土 | 16. にぶい黄橙色粘土 |
| 3. 浅黄色粘土 | 10. 明黄褐色粘土 | 17. にぶい黄橙色粘土 |
| 4. 浅黄色粘土(炭混) | 11. 明黄褐色粘土 | 18. にぶい黄橙色粘土 |
| 5. 灰白色粘土 | 12. にぶい黄橙色粘土(炭混) | 19. 明黄褐色粘土 |
| 6. にぶい黄橙色粘土 | 13. 明黄褐色粘土(が提) | 20. 灰白色粘土 |
| 7. にぶい黄橙色粘土(炭混) | 14. にぶい黄橙色粘土 | 21. 褐灰色粘土(炭層) |

第31図 II-55調査区07-OD平面図・断面図

式であり、3も上下端部を欠損するが、凸基有茎式であると思われる。4は下部を欠損しており、未製品であると思われる。5の大型蛤刃石斧は床面直上から出土した。砂岩を素材としている。上端を欠損しており、磨耗が激しい。

01、07—ODの周辺には、弥生土器が出土する土坑および柱穴が検出できる。



第32図 II-55調査区07-OD出土石器

土坑42—〇〇・92—〇〇は、07—〇Dの南東、G16—XH、YH、XI、YIで検出した。07—〇Dに切られている。42—〇〇は、92—〇〇にも切られている。短径1.7m、長径2.5mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は、黄褐色シルトである。弥生土器片、サヌカイト細片が出土した。

92—〇〇は、短径0.5m、長径1.2mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土は、暗褐色シルトである。遺物は出土しなかったが、42—〇〇を切り、07—〇Dに切られているため、弥生時代と思われる。

58—〇〇は、07—〇Dの北北西、G16—WG、WH、XG、XHで検出した。短径1.2m、長径2.2mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土は、黄褐色シルトであり、炭が混入する。遺物は出土しなかったが、この遺構も07—〇Dに切られているため、弥生時代と思われる。

柱穴62、63—〇Pは、01—〇Dの西、G16—XJで検出した。62—〇Pは、直径0.2mの円形を呈し、深さ0.1mを測る。63—〇Pは直径0.3mの円形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は、ともに明黄褐色シルトである。遺物は出土しなかったが、埋土が01—〇Dと同じなため、調査担当者は弥生時代と判断している。

55調査区における上記弥生時代遺構の他にも、以下の弥生時代遺構を検出した。02—〇X、03—〇P、04—〇X、21—〇S、44—〇Xである。

02—〇XはG16—PE、QE、PF、QF、GQで検出した。調査区最北端から検出したため、その全容は明らかにできなかった。深さ0.7mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。礫が多く混入している。埋土中より、弥生土器片が出土した。丘陵が榎井川に向かって落ち込む位置にあたるので、弥生時代における本来の地形を検出したものと思われる。

03—〇Pは、G16—QGで検出した。短径0.6m、長径0.8mの楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は、にぶい黄褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

04—〇Xは、G16—THで検出した。短径3.5m、長径4mのいびつな楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。埋土はにぶいオリーブ褐色シルトである。礫が多く混入している。埋土中より、弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

21—〇Sは、G16—WE、VF、WFで検出した。北東から南西方向の溝であり、調査区外に続いている。北東部分は土坑状を呈する。北東部分で幅1m、溝部分で幅0.3m、検出長4m、深さ0.6mを測る。埋土は2層に分けることができる。上層はオリーブ褐色

粘質土、下層および溝部分は褐色粘土である。弥生土器細片が出土した。

44—O Xは、調査区南端、G16—I D、I E、J D、J Eで検出した。この遺構のみ、急斜面部から検出した。短径1.3m、長径3mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。土坑内に直径0.3～0.5m、深さ0.2mの小穴が4個並ぶ。埋土は、明褐色シルトである。弥生土器片が出土した。

古墳時代前期の遺構は、土坑2基と谷地形を検出した。

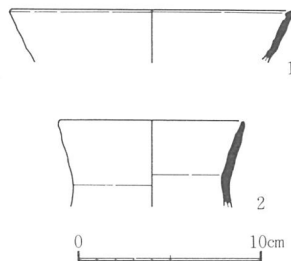
28—O Xは、調査区のはぼ中央部のG21—D H、D I、E H、E I、F H、F Iから検出した。短径2.6m、長径6.8mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土は、明褐色砂混じり粘土である。弥生土器片が出土した。布留式の高杯の杯部が出土した。

96—O Xは28—O Xと同様、調査区のはぼ中央部のG21—C Jから検出した。幅0.6m～2m、長さ9mの溝状を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は、明褐色砂混じり粘土である。遺物は出土しなかった。

谷地形は、調査区の中央西側、II—53調査区にむかって落ち込んでいく。谷の北側のG21—D L、D K付近では柱穴を密集して検出した。

いずれも深さが浅く、住居に伴うものとは考えられない。

この柱穴群の近辺、G21—D Kより浅い落ち込み59—O Xを検出した。この落ち込みから焼土塊と共に布留式土器片が出土した。今回は2点図化した。1は甕口縁部、2は小型丸底壺の口縁部である。



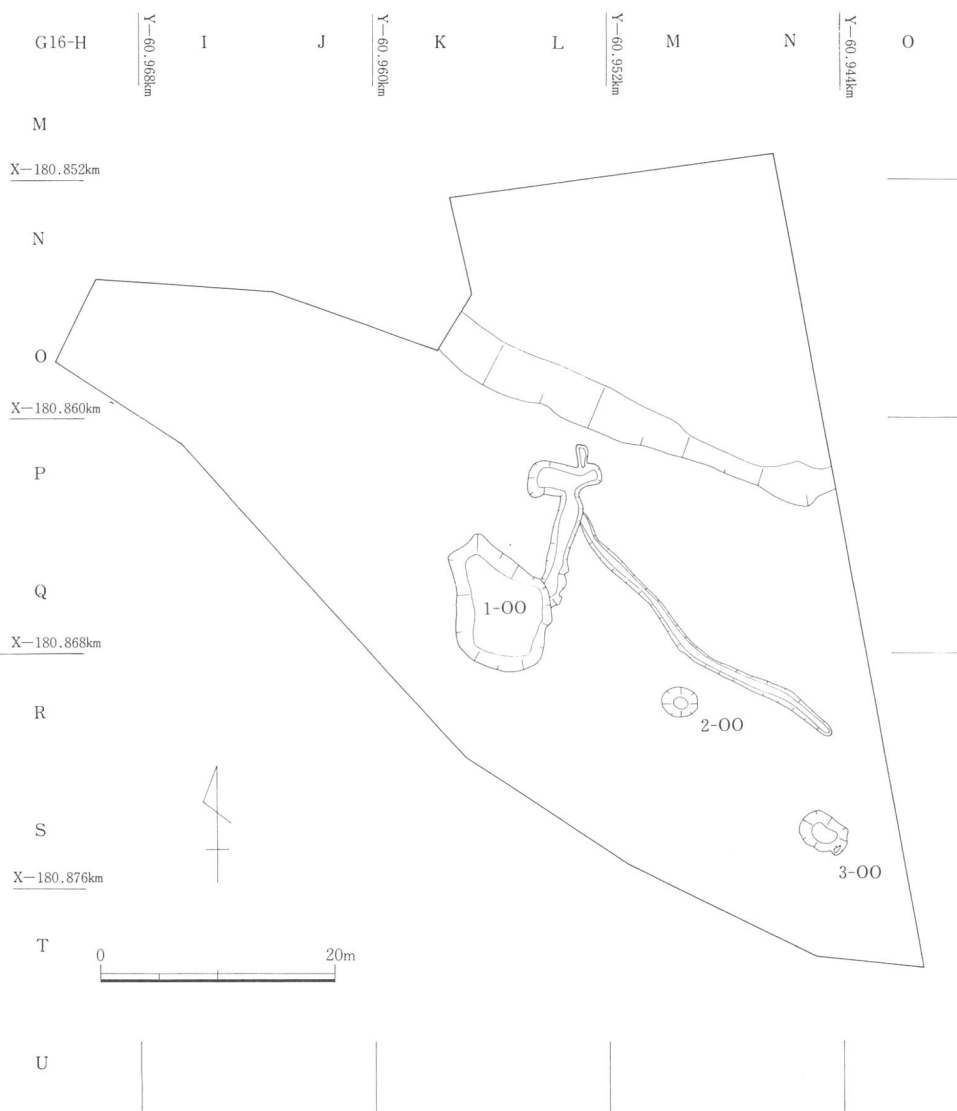
中世の遺構は、土坑1基を検出した。

第33図 II—55調査区59—O X出土土器

25—O Xは、G21—D F、D G、E F、E Gから検出した。長辺5m、短辺4mの長方形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土は、褐灰色砂混じり粘質土である。室町時代の土師器、瓦片が多量に出土した。

II-57調査区は、F地区の北端、54、55調査区の北に設定した調査区である。丘陵の北斜面にあたる。現状は南から北へ下がる、2段にわたる耕作地である。55調査区との比高差約3mを測る。57調査区から北はまた急激な崖面になっており、H地区に続く。

基本層序は、第1層現代の耕作土、第2層床土、第3層黄灰色砂質土（旧耕作土）、第4層明黄褐色砂質土、第5層明褐色砂質土、第6層黄褐色粘土、第7層にぶい黄褐色砂質土砂、第8層礫層（地山）である。



第34図 II-57調査区第1遺構面平面図

遺構面は、2面検出した。第1遺構面は、第7層上面で検出した。土坑を4基と、水田に関連すると思われる溝1条を検出した。これらの遺構からは弥生時代中期の遺物が出土したが、この遺物は後述する第7層からの出土である。遺構自体は、中世から近世にかけてと考えられる。

第2遺構面は、地山上面から検出した。落ち込みを1基検出した。弥生時代中期後半の遺物が出土した。

さて、57調査区第7層からは多量の弥生土器が出土した。この量は、今回の調査で出土した弥生土器のほとんどが、この調査区から出土したといっても過言ではない。また、55調査区に近いほど出土数が多い。また、時期的にも中期後半(Ⅲ新～Ⅳ)に属する遺物が多い。

57調査区から出土した土器は、摩滅が激しく、細片が多い。また時期的にも55調査区に近いことから、これらの土器は、55調査区から57調査区に土器を捨てられたものか、あるいは55調査区からの流れこみと考えられる。

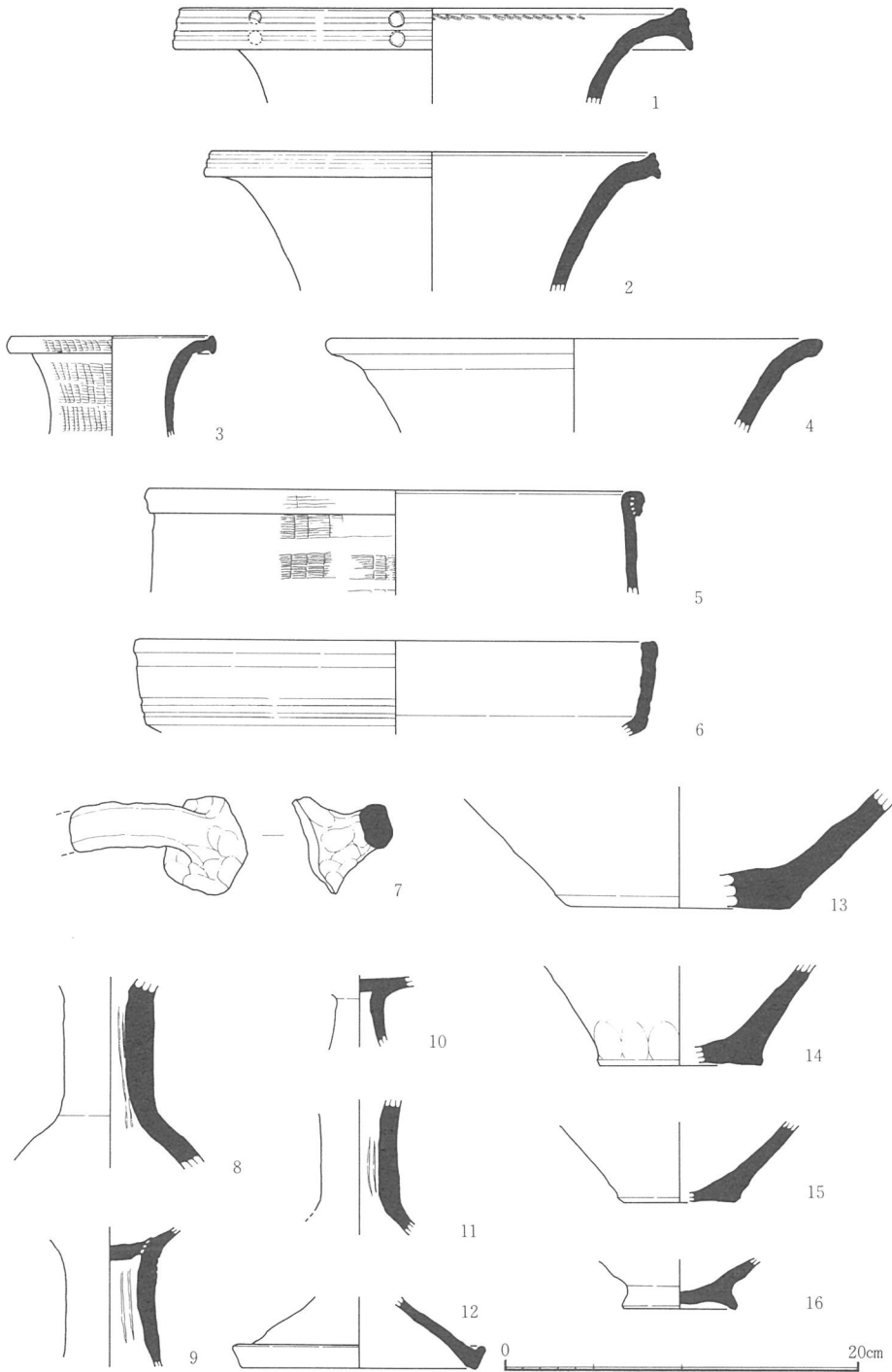
1から4は広口壺である。1は端部を垂下させたタイプの広口壺で、端部外面に凹線文および円形浮文を、端部内面には列点文を施している。内外面はナデによる調整をしている。口縁部径28.4cmを測る。2は口縁端部に凹線文を施し、口縁部径25cmを測る。3は小形の広口壺で、口縁端部および体部に簾状文を施している。口縁部径11.4cmを測る。4は内外面ともナデによる調整をしている。口縁部径27.8cmを測る。

5は台付鉢である。口縁部を折返し、口縁端部および体部に簾状文を施している。内面はナデによる調整をしている。口縁部径27.8cmを測る。

6は高坏の坏部である。外面に凹線文を施し、口縁部径29cmを測る。7は水差し形土器の把手である。全面ナデによる調整をしている。

8から12は高坏脚柱部、高坏裾部である。高坏脚柱部は棒状を呈するものが多くすべて中空である。10を除き内部にしぼり目をもつ。9、10から坏部は椀状を呈するものと思われる。高坏裾部は「ハ」の字状に直線的に開く形態をしている。いずれも摩滅が激しくその他の調整等は不明である。

13から16は底部である。13から15は壺、16は台付鉢の底部であると考えられる。14外面に指おさえが残っているが、いずれも摩滅が激しくその他の調整等は不明である。



第35图 II-57调查区第7层出土遗物

(2) G地区

G地区は京上川左岸に位置する。F地区から続く、丘陵の北東斜面および樫井川の中位段丘面上に立地する。この地区の丘陵最上部と中位段丘面の最下部との比高差は約10mを測る。現状は数段に分かれた耕作地である。丘陵北東斜面にII-60、68調査区を、樫井川の中位段丘面上にII-56、58、59調査区を設置した(第37図)。

II-68調査区は、丘陵北東斜面の最上部に位置する調査区である。現状は一面の耕作地である。68調査区は現地形の観察から、丘陵の北東斜面を削って造成した耕作地であると思われた。このため、遺構・遺物の存在は希薄であると予想された。このため、大阪府教育委員会と協議の上、68調査区についてはまずトレンチ調査を実施し、遺構・遺物を確認すればトレンチを拡張することとなった。

斜面に直行する方向に幅1m、長さ30mのトレンチと、斜面の傾斜に合わせて幅1m、長さ7.5mのトレンチを2ヶ所、計3ヶ所のトレンチを設定した。

基本層序は第1層現代耕作土、第2層床土、第3層灰色粘土および明黄褐色粘土の混合層、第4層浅黄橙色粘土、第5層褐色砂礫(地山)である。第3、4層は盛土である。

第1、2層を除去するとすぐに地山となる。しかし、斜面に直行するトレンチの西端と、斜面の傾斜に合わせたトレンチの北側から、丘陵の本来の地形であると思われる傾斜を確認した。この傾斜部に第3、4層を盛土して、耕作地を造成している。

68調査区からは、遺構・遺物は確認できなかった。

II-60調査区は、68調査区の北西に位置する。現状は斜面上に築かれた、3段にわたる耕作地である。調査区の長さ約25mに対して、その比高差は約5mを測り、急峻な斜面上に築かれた耕作地である。60調査区についても、68調査区と同様に大阪府教育委員会と協議の上、まずトレンチ調査を実施し、遺構・遺物を確認すればトレンチを拡張することとなった。

最上部の耕作地に、斜面に直行する方向に幅2m、長さ40mのトレンチを設定した。また、斜面の傾斜に合わせて幅2m、長さ15mと29mのトレンチを2ヶ所、計3ヶ所のトレンチを設定した。

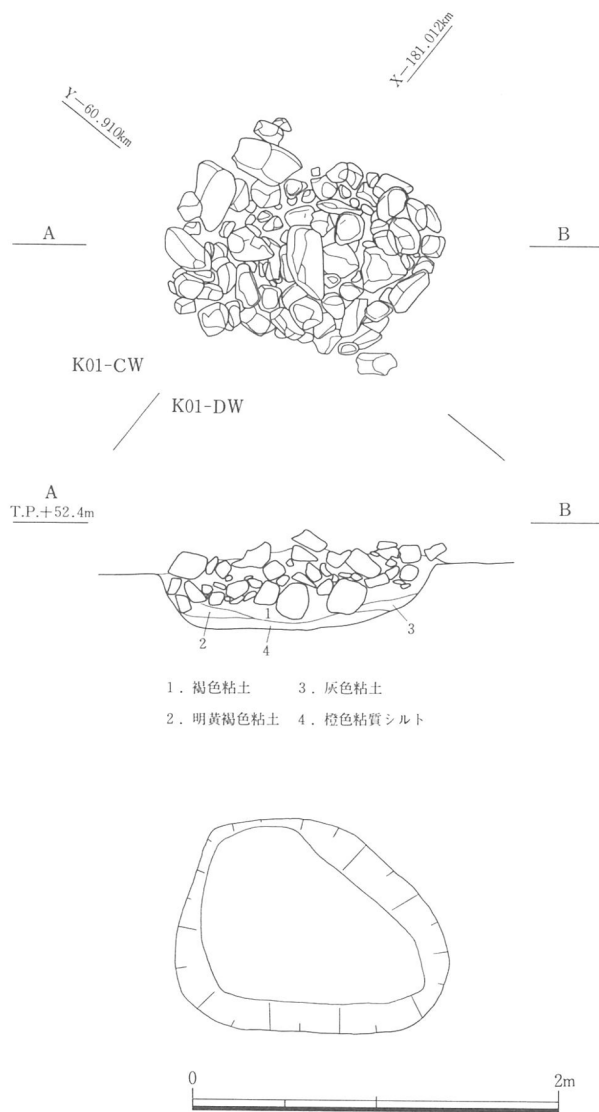
基本層序は最上部の耕作地にいたトレンチで代表する。第1層現代耕作土、床土、旧耕作土、床土、第2層黄褐色シルト、第3層灰白色粘土、明黄褐色シルトなど、第4層黄灰色シルト、第5層灰白色粘土、明黄褐色粘土など(地山)である。第2層より14~15世紀の遺物が出土した。第3層は盛土であり、第4層は旧の耕作土である。このことから、

第4層の耕作地の上面に第2、3層の盛土をし、新たに耕作地を造成し直していることがわかる。

遺構は、最上段のトレンチから検出した。17条の溝群、土坑1基、石組み土坑1基である。第4層上面あるいは地山上面から検出した。土坑および石組み土坑についてはトレンチを拡張し、その全容を調査した。

溝群は北東から南西および、北西から南東方向の溝である。北東から南西方向の溝は、第4層上面から検出した。8条の溝群である。K01—E X、E Yから検出した。幅0.4～1 m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は浅黄色シルトである。北西から南東方向の溝は、地山上面のK02—E A、E Bから検出した。幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.3mを測る。埋土は灰色シルトである。南北方向の溝は、旧耕作土上面の第4層から、東西方向の溝は地山上面から検出した。溝の規模、間隔から、南北方向の溝は畦溝、東西方向の溝は鋤溝で考えられる。

石組みの土坑10—O Xは、K01—C W、D Wから検出した。長さ1.5m、幅1.2mの規模をもち、楕円形を呈する。深さは0.4mを測る。この土坑内に直径0.1～0.3mの河原石がぎっしり詰められていた。石のほとんどは砂岩であるが、若干の花崗岩が混じる。石を積み上げた土坑墓と考えられるが、遺物が出土しなかったためその詳細

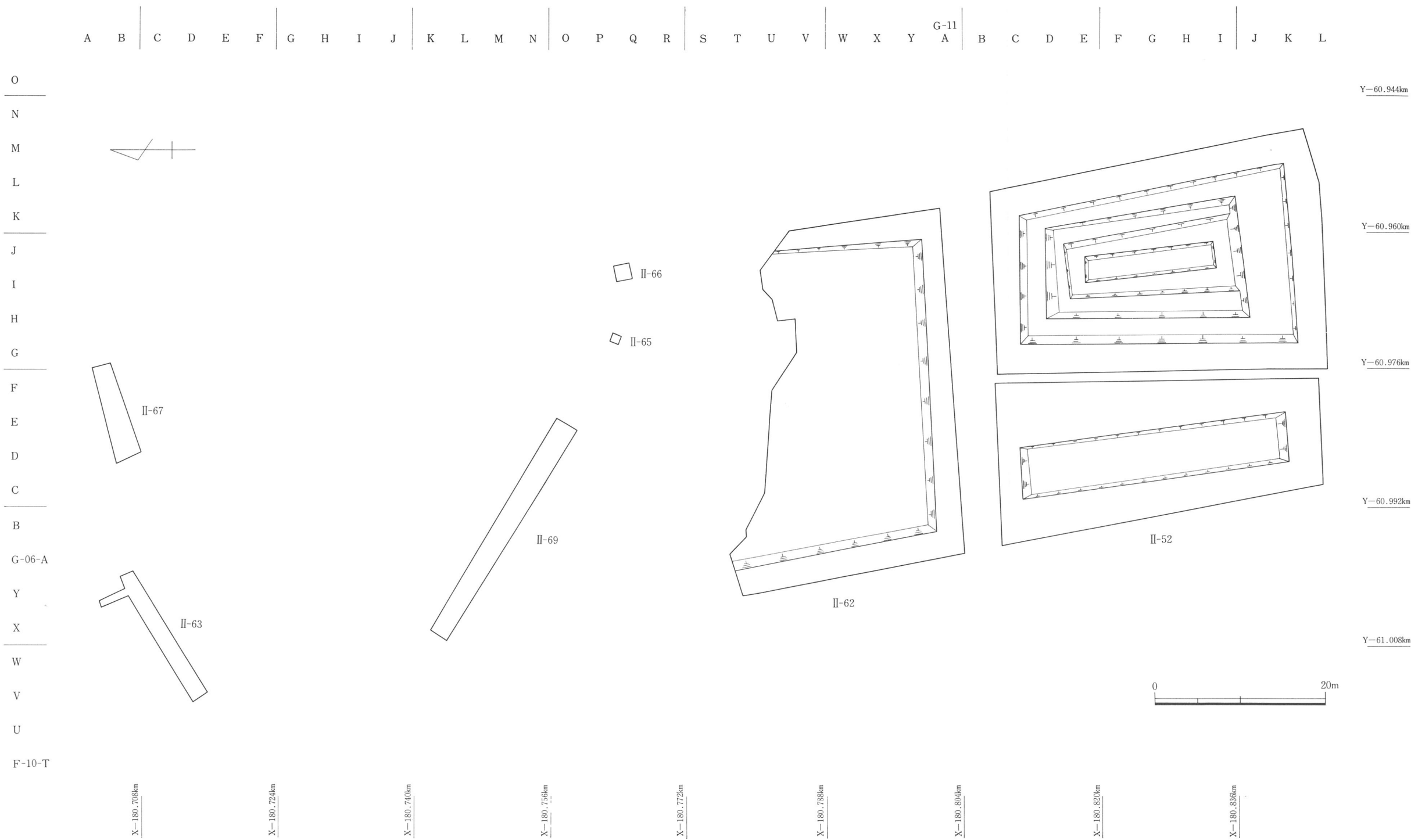


第36図 II-60調査区10-O X平面図・断面図

G-22 | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y | K-02 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O



第37图 II-G地区調査区位置图



第38图 II-H地区調査区位置图



第39図 II-63調査区石組み平面図

(4) I 地区

I 地区は京上川の右岸、G地区の対岸部に位置する。すぐ東側に京上川が流れている。京上川との比高差は約8mを測る。I区E地区から続く西に向かう丘陵の先端部である。現状は耕作地である。この地区では京上川が大きく蛇行しており、西に突出した形となっている。I地区にはII-61調査区およびII-64調査区を設定した(第40図)。

現状地形の観察から61調査区、64調査区とも丘陵西斜面を削って造成した耕作地であると思われる。このため、I地区についても、大阪府教育委員会と協議の上、まずトレンチ調査を実施し、遺構・遺物を確認すればトレンチを拡張することとなった。

II-61調査区は、丘陵に直行するように、幅2m、長さ8mの調査区を設定した。現代の耕作土、床土を除去すると、すぐに地山となるが、調査区南側から、南に傾斜する地形を検出した。これは丘陵の本来の地形であると思われる。丘陵を削りその土で傾斜地を埋め、耕作地を造成したものと思われる。

61調査区からは、遺構・遺物を確認することはできなかった。

II-64調査区には、丘陵に直行および平行するようにトレンチを設定した。丘陵に直行するトレンチは幅2m、長さ50m、平行するトレンチは幅2m、長さ42mである。調査の結果、下層より旧耕作地を検出した。そして、丘陵に直行するトレンチの南側より石組みの暗渠を検出した。このため、暗渠の部分のみ調査区を拡張して、その全容を調査した。

64調査区の基本層序は、第1層現耕作土、第2層現床土、第3層灰白色砂礫(盛土)、第4層褐灰色粘土(旧耕作土)、第5層黄橙色粘土(旧床土)、第6層明青灰色砂礫(地山)である。

第3層は、0.5~1mの厚さをもっている。この層は、現状の耕作地を造成する際の盛土である。旧耕作地は、トレンチの断面の観察から、調査区の西側、南北ラインでいうとK03-T($Y=-60.824\text{km}$)より以西でのみ確認できる。

石組みの暗渠01-OIは第4層(旧耕作土)の上面、K02-HR、HS、IQ、IRから検出した。南西から北東に向かう暗渠である。第4層の上面から検出したので、第1、2層の耕作地に関連した施設であると思われる。

残存長8mを測り、幅0.2m、長さ0.4mの礫を一行に並べている。この下には直径0.1mの小礫を左右に置き、暗渠としている。底には礫を敷いていない。暗渠の東側約3.5mでは直径約0.3mの礫を、0.5mの幅で南側に敷き詰めている。暗渠の掘り形は確認できなかった。